

## 【D年】聖霊降臨節第13主日(2024年8月11日)

## 【旧約聖書日課】ヨブ記 28章12～28節

- 12 では、知恵はどこに見いだされるのか  
分別はどこにあるのか。
- 13 人間はそれが備えられた場を知らない。  
それは命あるものの地には見いだされない。
- 14 深い淵は言う  
「わたしの中にはない。」海も言う  
「わたしのところにもない。」
- 15 知恵は純金によっても買えず  
銀幾らと価を定めることもできない。
- 16 オフィルの金も美しい編めのうも  
サファイアも、これに並ぶことはできない。
- 17 金も宝玉も知恵に比べられず  
純金の器すらこれに値しない。
- 18 さんごや水晶は言うに及ばず  
真珠よりも知恵は得がたい。
- 19 クシュのトパーズも比べられず  
混じりない金もこれに並ぶことはできない。
- 20 では、知恵はどこから来るのか  
分別はどこにあるのか。
- 21 すべて命あるもの目にそれは隠されている。  
空の鳥にすら、それは姿を隠している。
- 22 滅びの国や死は言う  
「それについて耳にしたことはある。」
- 23 その道を知っているのは神。  
神こそ、その場所を知っておられる。
- 24 神は地の果てまで見渡し  
天の下、すべてのものを見ておられる。
- 25 風を測って送り出し  
水を量って与え
- 26 雨にはその降る時を定め  
稲妻にはその道を備えられる。
- 27 神は知恵を見、それを計り  
それを確かめ、吟味し
- 28 そして、人間に言われた。  
「主を畏れ敬うこと、それが知恵  
悪を遠ざけること、それが分別。」

## 【使徒書日課】

## コリントの信徒への手紙一 2章11節～3章9節

- 2<sup>11</sup>人の内にある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません。<sup>12</sup>わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。<sup>13</sup>そして、わたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、「霊」に教えられた言葉によっています。つまり、霊的なものによって霊的なことを説明するのです。<sup>14</sup>自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです。<sup>15</sup>霊の人は一切を判断しますが、その人自身はだれからも判断されたりしません。

- 16 「だれが主の思いを知り、主を教えるというのか。」しかし、わたしたちはキリストの思いを抱いています。
- 3<sup>1</sup>兄弟たち、わたしはあなたがたには、霊の人に対するように語るができず、肉の人つまり、キリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように語りました。<sup>2</sup>わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にするができなかったからです。いや、今でもできません。<sup>3</sup>相変わらず肉の人だからです。お互いの間にねたみや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか。<sup>4</sup>ある人が「わたしはパウロにつく」と言い、他の人が「わたしはアポロに」などと言っているとすれば、あなたがたは、ただの人にすぎないではありませんか。<sup>5</sup>アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。<sup>6</sup>わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。<sup>7</sup>ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。<sup>8</sup>植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに忘れて自分の報酬を受け取ることになります。<sup>9</sup>わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 7章40～52節

- 40 この言葉を聞いて、群衆の中には、「この人は、本当にあの預言者だ」と言う者や、<sup>41</sup>「この人はメシアだ」と言う者がいたが、このように言う者もいた。「メシアはガリラヤから出るだろうか。<sup>42</sup>メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」<sup>43</sup>こうして、イエスのことで群衆の間に対立が生じた。<sup>44</sup>その中にはイエスを捕らえようと思う者もいたが、手をかける者はなかった。
- 45 さて、祭司長たちやファリサイ派の人々は、下役たちが戻って来たとき、「どうして、あの男を連れて来なかったのか」と言った。<sup>46</sup>下役たちは、「今まで、あの人のように話した人はいません」と答えた。<sup>47</sup>すると、ファリサイ派の人々は言った。「お前たちまでも惑わされたのか。<sup>48</sup>議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか。<sup>49</sup>だが、律法を知らないこの群衆は、呪われている。」<sup>50</sup>彼らの中の一人で、以前イエスを訪ねたことのあるニコデモが言った。<sup>51</sup>「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか。」<sup>52</sup>彼らは答えて言った。「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者の出ないことが分かる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨブ記 28章12～28節

- 12 では、知恵はどこに見いだされるのか  
分別はどこにあるのか。
- 13 人はそこに至る道〔LXXその値〕を知らない。  
生ける者の地には見いだされない。
- 14 深い淵は言う  
「それは私の中にはない」と。  
海は言う  
「私のところにもない」と。
- 15 知恵によって純金を得ることはできず  
銀がその値として量られることもない。
- 16 オフィルの金でも、高価なカーネリアンや  
ラピスラズリでも引き換えにできない。
- 17 金もガラスもそれに比べることはできず  
純金の器もそれと交換できない。
- 18 さんごと水晶は言うに及ばず  
知恵から得るものは真珠にまさる。
- 19 クシュのトバースもそれに比べることはできず  
純金でも引き換えにできない。
- 20 では、知恵はどこから来るのか  
分別はどこにあるのか。
- 21 それは生ける者すべての目に隠され  
空の鳥にも隠されている。
- 22 滅びの国も死も言う  
「私たちは耳でそれを伝え聞いたことがある。」
- 23 神はその道を悟り  
神がその場所を知っておられる。
- 24 神は地の果てまで目を凝らし  
天の下をことごとく見ておられる。
- 25 神は風に重さを与え  
水を秤で量る。
- 26 雨には定めを  
稲妻には道を与えたとき
- 27 神は知恵を見て、これについて語り  
これを確かめ、探し出した。
- 28 そして、人に言われた。  
「主を畏れること、これが知恵である。  
悪を離れること、これが分別である。」

コリントの信徒への手紙一 2章11節～3章9節

211人の内にある霊以外に、一体誰が人のことを知るでしょう。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません。12私たちは世の霊ではなく、神の霊を受けました。それで私たちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。13この賜物について語るにも、私たちは、人の知恵が教える言葉ではなく、霊が教える言葉を用います。つまり、霊によって霊のことを説明するのです。14自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊に属する事

柄は、霊によって初めて判断できるからです。15霊の人は一切を判断しますが、その人自身は誰からも判断されたりしません。

- 16「誰が主の思いを知り  
主に助言するというのか。」  
しかし、私たちはキリストの思いを抱いています。  
31きょうだいたち、私はあなたがたには、霊の人に対するように語るができず、肉の人、つまりキリストにある幼子に対するように語りました。  
2私はあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にすることができなかつたからです。いや、今でもできません。3相変わらず肉の人だからです。互いの間に妬みや争いがあるかぎり、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか。4ある人が「私はパウロに付く」と言い、他の人が「私はアポロに」と言っているようでは、あなたがたはただの人ではありませんか。5アポロとは何者ですか。パウロとは何者ですか。二人は、あなたがたを信仰に導くために、それぞれ主がお与えになった分にに応じて仕える者です。6私が植え、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させてくださったのは神です。7ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神なのです。8植える者と水を注ぐ者は一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受けます。9私たちは神の協力者、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。

ヨハネによる福音書7章40～52節

40この言葉を聞いて、群衆の中には、「この人は、本当にあの預言者だ」と言う者や、41「この人はメシアだ」と言う者がいたが、このように言う者もいた。「メシアがガリラヤなどから出るだろうか。42メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」  
43こうして、イエスのことで群衆の間に対立が生じた。44その中にはイエスを捕らえようと思う者もいたが、手をかける者はなかった。  
45さて、祭司長たちやファリサイ派の人々は、下役たちが戻って来たとき、「どうして、あの男を連れて来なかったのか」と言った。46下役たちは、「今まで、あの人のように話した人はいません」と答えた。47すると、ファリサイ派の人々は言った。「お前たちまでも惑わされたのか。48議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか。49だが、律法を知らないこの群衆は、呪われている。」50彼らの中の一人で、以前イエスを訪ねたことのあるニコデモが言った。51「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか。」52彼らは答えて言った。「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者が出ないことが分かる。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・8月11日「聖霊降臨節第13主日」の日課主題は「神からの真理」。

・旧約聖書日課は、「ヨブ記」から、ヨブと友人の対話三巡目の中でヨブが答える神の知恵についての言説の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、「霊」についての原則的な考えを提示する箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、仮庵祭に際しての主イエスの発言に対する人々の反応を伝える箇所。

**旧約日課(ヨブ 28章より)**

・「ヨブ記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「諸書」の中で「詩編」および「箴言」と共に「エメット」と呼ばれる韻文集の一つ。導入部(1~2章)と末尾(42章後半)に置かれた散文体の「ヨブの説話物語」に挟まれて、韻文体による対話物語が展開されている。対話物語は、ヨブと三人の友人との対話が三巡した後に、四人目の友人との対話を経て神の告知で終わる。

・本書の主題は、一般に、「義人の受ける苦難の意味」を問うことにあるとみなされている。ただし、説話物語部分と対話物語部分の双方を貫く解答が提示されているわけではなく、その主題を巡る論考はもっぱら対話物語部分が負っている。日課箇所は、ヨブと三人の友人との三巡目の対話の中、シュア人ビルダドの発言に対してヨブが答える主張に続く部分を為している。

・本書でヨブと三人の友人との間で論じられ、繰り返し問われることは、人が苦難を被るのはその人が何らかの罪を犯したからだという現世的因果応報論の妥当性である。本書を初めとする旧約文書の多くは、終末の復活信仰を前提とする「最後の審判」のような来世的因果応報論を取らないため、現世で苦難を受ける「義人」の問題が惹起される。ヨブの友人たちが繰り返し指摘するのは、「義人」であることを自認するヨブが、実際には神に対して罪を犯した者であり、「義人」とは言い切れないがゆえに、神の裁きとしての苦難を甘受すべきなのだ、ということである。他方でヨブが主張するのは、自分が神の前で断じて罪を犯しておらず「義人」を自認する資格を有するのであって、神の裁きを受けるべきは神に逆らう者たちである、ということである。しかし、両者の議論は堂々巡りを繰り返しており、結論が得られない。

・日課箇所は、そのような三人の友人たちとの議論が不完全燃焼のままに終結し、ヨブの嘆息の訴え(29~31章)に至る狭間に置かれた、神の知恵に関する箴言章句で、対話者の発言ではなく編集者の挿入と考えられる。末尾28節の句は、正典「箴言」で繰り返し提示される知恵に関する基本的な姿勢を示す句と一致する(箴1:7, 9:10など)。神を知恵の淵源として見る「神の知恵」観に基づき、「知恵」と「神信仰」が密接不可分のものとして位置づけられている。

**使徒書日課(Ⅰコリント章)**

・「コリントの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡集」の第二に置かれた書簡文書。パウロが、独自の宣教団を組織して行ったマケドニア伝道の後にたどり着いたコリントで、ローマの教会メンバーと共に立ち上げた教会共同体に宛てて記した一連の書簡の一つ。コリントの教会共同体は、ペトロを筆頭とするローマの教会やアポロを送り出しているアレクサンドリアの教会など、多様な指導者によって形成されたが、パウロにはその一角を担っているという自負がある。事実、パウロを指導者と仰ぐグループが存在し、パウロがコリントを去った後も彼のもとを訪ね、教会の実情を知らせたり助言を求めたりしていたと推認される。しかし、パウロを指導者と認めない者も多かったのが実態で、一連の書簡は、パウロとコリントの教会メンバーとの間に生じた認識のずれを浮き彫りにさせている。

・本書簡の1~3章でパウロは、自身がコリントの教会メンバーに対して指導者の一人としてどのような姿勢で向き合おうとしているのかという基本的な考えを提示している。そのことを示すために、パウロは、1:17「言葉の知恵によらないで告げ知らせる」という句から、「知恵」に関する言説を展開している。パウロがここで「言葉の知恵」として提示するのは、「世の知恵」あるいは「自分の知恵」とも表現する「知恵」で、「神の知恵」と対比させられるものである。パウロは、その「知恵」を「ギリシア人が探し求めるもの」としており、「ギリシア的な知恵」ということを強く意識しつつ、それに対置した「神の知恵」を示そうとしている。おそらく、コリントの教会でパウロを指導者と認めない者たちの中に、「ギリシア的な知恵」に長けた者、あるいはそのような「知恵」を重んじる者がいると、彼は考えていたのだろう。パウロは、この一連の言説の中で繰り返し「アポロ」について触れているが、彼は「アレクサンドリア生まれのユダヤ人で、聖書に詳しい…雄弁家(ロギオス)」(使徒18:24)であったと伝えられており、ユダヤ人でありながら「ギリシア的な知恵」の素養を身に着けた学者(ロギオス)と見られていた。パウロは、ギリシア文化の教養に溢れたアポロの指導を良しとするメンバーを意識して、自身の教えがそれとは異なる「神の知恵」に依拠するものであることを示そうとしている。日課箇所では、その「神の知恵」を知ることができる根拠として「神の霊」を提示し、読者に対して「霊の人」として自身の教えを理解してほしいと訴えている。

・「霊の人」と対比的に、「肉の人」という表現が繰り返されている。「パウロ書簡集」においては、原則として、「霊(プネウマ)」と「肉(サルクス)」は対義的に、「霊」は「神・天上に属すること」を、「肉」は「人・地上に属すること」を指して用いられる。このような用法では、「霊」も「肉」も、それ自体が実体的に考えられてはならず、あくまでも人の属性や姿勢・態度を示す概念として用いられている。他方で、「神の霊」という表現は、しばしば「霊」を実体的に捉えて用いられている。

**福音書日課(ヨハネ 7 章より)**

・日課箇所は、「仮庵祭」を場面設定とするまとめ(7～10 章)の中に置かれた人々の反応を示す箇所。人々は、「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日」(37 節)、その祭礼にいわば異議を申し立てるようにして告げられた主イエスの言葉に反応したものとされている。また、後半(45 節以下)は、遣わした下役が戻り報告を受けた祭司長たちやファリサイ派の人々、議員らが議論をしている場面として描かれており、おそらく「最高法院(サンヘドリン)」を想定しているものと考えられる。37 節で設定された日は、エルサレム城外の貯水池から祭司らが水を汲み、人々と共に行列を為して神殿まで運び上げ、祭壇に注ぎかけるという祭礼が行われた日を指すと考えられる。

・前半(40～44 節)で描かれる人々の主イエスに対する見立ては、共観福音書でも伝えられている伝承と重なり合う。すなわち、主イエスが弟子たちに「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」(マタイ 16:13 ほか)と問うたことに対して弟子たちが報告した人々の主イエスに対する見立てである。共観福音書では、主イエスがこれらの問いを弟子たちに向けられたのは、弟子たち(ペトロ)の信仰告白を引き出す呼び水であったように描かれている。他方で、日課箇所では、人々の反応が主イエスに対して好意的なものばかりでなく批判的なものもあったことを示し、人々の間での主イエスに対する見立てが大きく分裂していたことを強調している。このような強調は、本福音書で繰り返し描かれる特徴的な視点である。

・後半(45 節以下)で登場する人々は、共観福音書が「祭司長たちと最高法院の全員」(マタイ 26:59)として描くユダヤ社会の中核を担う支配層を想定していると考えられる。しかし、ここで描かれる人々は、共観福音書が単純化して描くように一丸となって主イエスに敵対する集団ではなく、その中に異なる意見を持つ者たちを含む集団である。その代表格として、「ファリサイ派に属」し「ユダヤ人たちの議員」でもあった「ニコデモ」(3:1)が明示的に登場させられている。ユダヤ支配層を敵対的にのみ描かず、その中に一定の支持者や真理を見るように示唆するのは、「ヨハネ」の特徴である(11:45 以下も参照)。

**来週の誕生日 (8 月 11 日～17 日)****主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-204「よろこびの日よ」(= I 54)は、19 世紀英国教会司祭クリストファー・ワーズワースが 1862 年出版の讃美歌集に収めた「主の日」の喜びを歌う詞。彼は、詩人ウィリアム・ワーズワースの甥。曲は、ドイツの民謡曲を 19 世紀米国の音楽家メーソンが讃美歌用に編曲。
- ・21-15「愛するイエスよ」(I-19 番「みこえきくとて」)は、17 世紀ドイツの牧師クラウスニツァーの作詞で、

各国で広く歌われている讃美歌。「説教の前に」という原題が付されている。曲は、17 世紀ドイツの教会音楽家アーレの作曲で、最初はアドヴェントの独唱曲のために作られたが、後に出版された讃美歌集でクラウスニツァーの歌詞と組み合わせられた。

- ・21-363「み神の力は」は、18 世紀前半の代表的な英語讃美歌作家 I.ウオッツが子どものための讃美歌集(1715 年)のために作詞したものに、V.ウィリアムズが紹介したイギリス民謡曲を組み合わせせたもの。

**21-204「よろこびの日よ」****O Day of Rest and Gladness**

1. O day of rest and gladness, / O day of joy and light, / O balm for care and sadness, / most beautiful, most bright: / on you the high and lowly, / through ages joined in tune, / sing "Holy, holy, holy," / to the great God triune.
2. On you, at earth's creation, / the light first had its birth; / on you, for our salvation, / Christ rose from depths of earth; / on you, our Lord victorious / the Spirit sent from heav'n; / and thus on you, most glorious, / a three-fold light was giv'n.
3. Today on weary nations / the heav'nly manna falls; / to holy convocations / the silver trumpet calls, / where gospel light is glowing / with pure and radiant beams / and living water flowing / with soul-refreshing streams.
4. New graces ever gaining / from this our day of rest, / we reach the rest remaining / to spirits of the blest. / We sing to you our praises, / O Father, Spirit, Son; / the church its voice upraises / to you, blest Three in One.

**21-51「愛するイエスよ」****Liebster Jesu, wir sind hier, dich und dein wort**

1. Liebster Jesu, wir sind hier, / Dich und Dein Wort anzuhören; / lenke Sinnen und Begier / hin auf Dich und Deine Lehren, / dass die Herzen von der Erden / ganz zu Dir gezogen werden.
2. Unser Wissen und Verstand / ist mit Finsternis verhüllet, / wo nicht Deines Geistes Hand / uns mit hellem Licht erfüllet; / Gutes denken, tun und dichten / musst Du selbst in uns verrichten.
3. O Du Glanz der Herrlichkeit, / Licht vom Licht, aus Gott geboren, / mach uns allesamt bereit, / öffne Herzen, Mund und Ohren; / unser Bitten, Flehn und Singen / lass, Herr Jesu, wohl gelingen.

**21-363「み神の力は」****I Sing the Almighty Power of God**

1. We sing the mighty power of God / that made the mountains rise, / that spread the flowing seas abroad / and built the lofty skies. / We sing the wisdom that ordained / the sun to rule the day; / the moon shines full at his command, / and all the stars obey.
2. We sing the goodness of the Lord / that filled the earth with food; / he formed the creatures with his word / and then pronounced them good. / Lord, how your wonders are displayed, / where'er we turn our eyes, / if we survey the ground we tread / or gaze upon the skies.
3. There's not a plant or flower below / but makes your glories known, / and clouds arise and tempests blow / by order from your throne; / while all that borrows life from you / is ever in your care, / and everywhere that we can be, / you, God, are present there.